東高通信

令和５年度　２月号

日	曜	学　校　行　事　等	学年・進路・生徒指導	生徒会・部活動関係
1	木			
2	金	教育課程委員会⑦		
3	土	土曜学習会①		新人演奏会(吹奏楽)
4	日			
5	月	前期選抜出願(～8日)		
6	火			
7	水	SC		
8	木	校務運営委員会⑮		
9	金	学年末考査①、出願先変更(～14日)、職員会議⑮(15:45～)		
10	土	土曜学習会②		
11	日	建国記念の日		
12	月	振替休日		
13	火	学年末考査②、衛生委員会③		
14	水	学年末考査③		
15	木	学年末考査④		
16	金	PTA役員会③		
17	土			
18	日			
19	月			
20	火			
21	水	SC		
22	木	素点入力完了、調査書審査(45分授業)		
23	金	天皇誕生日		
24	土			
25	日		国公立大学前期日程試験（～26日）	
26	月			
27	火	学校評議員会②(14：45～) ワックスがけ(3年)		
28	水	SC		
28	火			
29	水	卒業式予行、表彰式		

「顔をあげて、われら開かれた道を行く」

3学年担任　粟村弥生

能登半島地震の甚大な被害状況が連日、報道されている。東日本大震災直後の被害状況と重なり、家族や家を失い、寒い体育館に避難し、断水や停電が続く中、学校にも行けず、日常を失った被災地の状況に心が痛みます。震災から、私たちが前に進んだように、時間はかかると思いますが、石川県の被災者の方々が日常の生活を取り戻し、少しでも元気に生活を送ってほしいものです。そのような災害が、いつ私たちにも起こるかわかりません。不安が尽きない、この時代を生きていくための考え方を3つ紹介します。

第一に、人間万事塞翁が馬です。自分にとって不幸なことが、将来幸福に転じることもあるかもしれないということです。人生は、どうなるかわかりません。もし、共通テストの結果が思うような結果ではなく、志望校を再検討して、がっかりしている3年生がいるなら、その決断が、これからの人生で想定外のプラスに進む可能性もないともいえません。困難なことにぶつかってもくじけないで、前を向き進んでいってほしいです。自分の人生は、周りの方々に支えられながら、自分の力で切り開いていくものだと思います。これからの人生で、楽しいこともたくさんあると思いますが、苦しいこともあると思います。そんな時、どうやって自分を奮い立たせ、困難に向かっていき、それを克服するかは自分次第なのです。東高の校歌に、「顔をあげて、われら開かれた道を行く」とあるように、下を向かずに、進んでほしいです。

第二に、みなさん一人一人は無限の可能性を秘めた存在であることを忘れないでください。何かをやろうと努力すれば、できないことはないと思います。あきらめないで何事にも挑戦してほしいです。自分で自分の可能性の限界を作らないことが大事です。自分でも気づいていない力が、あなたにはあるのです。自信を持ち、努力し続けてください。

最後に、私には、沖縄を訪れた際に聞いた忘れられない言葉があります。「ぬちるたから」（沖縄方言で「命こそ宝」という意味）、つまり命を大切にして下さいということです。生きてさえいれば、いくらでもやり直せます。過去の戦争や震災で多くの尊い命が犠牲になりました。今を生きる私たちは、先に旅立った人の分までどう生きていくべきなのでしょうか。私たちができることは、一日一日を大切に過ごし、幸せになることだと思います。それぞれが求める「幸せ」は違うでしょうが、その理想に向かって、頑張ってください。ご健闘を祈っています。

「漂泊の思ひ」

阿部善重

毎朝、白河市から通勤している。自宅を自動車で出発し、新幹線に乗って徒歩で締めくくる。自動車ではラジオを聴き、新幹線では本を読みながら時を過ごす。体を動かし、街並みを肌で感じることのできる徒歩は最高に気分がいい。片道1時間半、距離にして90㎞。毎日が旅だ。

新幹線の乗降駅である、新白河駅と福島駅の両駅では松尾芭蕉像が出迎えてくれる。芭蕉は「漂泊の思ひ」（ふらふらしたい気持ち）に突き動かされ『奥の細道』の旅に出る。その冒頭には、旅に生きる者への憧れが述べられている。芭蕉は、私の通勤を羨んでいることだろう。ちなみに進路指導室にいる先生方5人中4人が新幹線通勤の旅人である。

今年度は通勤以外にも旅をした。2学年副担任として行った、広島・大阪・京都の旅。ハンドボール部で不来方高校と闘うために行った、盛岡への旅。前任校の自転車競技部で共に汗を流した生徒を応援するために行った、インターハイ函館の旅。東北最高峰、燧ヶ岳（ひうちがたけ）登山の旅。小田和正の横浜アリーナ、スピッツの東京武道館ライブへの旅。

ところで、「旅」とは何だろうか。広辞苑には「住む土地を離れて、一時他の土地に行くこと」とある。なんだか味気ないので検索すると、旅に関する名言がわんさかヒットする。中でも刺さったのが「人が旅をするのは到着するためではなく、旅をするためである 」（ゲーテ）という言葉である。要は、「旅の過程にこそ価値がある 」（スティーブ・ジョブズ）ということであろう。そう考えると、日々の通勤は「旅」ではないのかもしれない。通勤は学校へ到着するための「手段」であって、移動自体を「目的」として価値を見出しているわけではないからだ。

逆に、今年度、その過程を「目的」として夢中になったものがある。「アニメ」と「ゲーム」である。アニメは『無職転生』。中二病的な内容が予想され敬遠していたが、ある生徒に勧められPrime Videoにアクセスした。面白い。侮れない。ゲームは『FINAL FANTASY XVI』。ド派手なアクションと差別をテーマとしたストーリーに引き込まれた。両者とも部屋から一歩も出なかったが、精神的には遠く深いところへ冒険した気がする。この経験も「旅」だったのだろう。「旅」は日常を離れ、様々な驚きや発見をもたらし、世界の広さを実感させてくれる。

さて、東高の校歌に「学ぶことは日々を新しくすること」という一節がある。学ぶことで昨日とは違う自分を作り、毎日を刺激に溢れたものにするということなのだろう。それはとても楽しいことだし、学ぶこと自体を「目的」にできれば「学び」を「旅」にすることもできる。日々「旅」すること、一生できたら最高じゃないですか。芭蕉が追い求めた境地を「学び」で目指してはいかがですか。

そんなことを考えながら今日も片道1時間半を「旅」にする。

ロンドンの思い出

浜田　敬子

“When a man is tired of London, he is tired of life; for there is in London all that life can afford.”これはイギリスの文学者、サミュエル・ジョンソンの言葉で、「ロンドンに飽きた者は人生に飽きた者だ。ロンドンには人生が与えうるもの全てがあるから」という意味です。大学時代ロンドン大学クイーンメアリーカレッジに一年間留学していた私にとって、とても納得できる言葉です。それほど、ロンドンでの一年間はとても思い出深いです。

ロンドンに住み始めた初めの頃は、現地人の英語のスピードについていくことができず、相手が何を話しているのか全く理解できませんでした。大学の講義やディスカッションだけでなく、スーパーでの買い物など生活の些細なことにも不自由さを感じましたが、3カ月を過ぎたあたりから徐々に英語が理解できるようになり、そのうち現地の友人とパブに行ったり、会話のなかで軽くジョークを言ったりすることができるようになりました。講義はばっちり！とは言えませんでしたが、毎週一冊文学作品を読むことが課題だったので、必死で読んで必死で講義についていきました。学生寮では、シンガポール、フィンランド、フランス、イギリス（インド系）、そして日本とそれぞれ出身が異なる5人が1つのキッチンを共有していたため、世界各国の料理が調理されていてちょっとした異文化交流が日々行われました。お正月に日本から送ってもらったお餅をフランス人のジャスミンに勧めたら、”Oh, no thank you!”とはっきり断られた時は、少しだけショックでしたが。ちなみに、フィンランド人のミンナが知っていた日本語は、「オタク」でした。

そんなキャンパスライフの中で決定的に日本と違っていたことが、同級生の中に60歳のジュリアがいたことです。彼女はずっと看護師として働いていましたが、定年退職を機に「もう一度人生を楽しみたい」と思い、大学に入学したそうです。イギリスでは珍しいことではないそうで、彼女の存在は周囲に自然に受け入れられていました。私と彼女はとても親しくなり、一緒に講義を受けたり、課題で読んだ文学作品に関連するイギリスの歴史や文化について教えてもらったり、イギリス中部への旅行に一緒に出掛けたりしました。

キャンパスの外、ロンドンの街中は、欧米人だけでなく、インド系やアフリカ系、アジア系や中東からの移民など様々な人種の人々が行き交っていて、とても刺激的でした。英語にどっぷり浸かり、様々な人種の人々と交流できたロンドンでの一年間は、世界の多様性に触れることができたとても貴重な経験でした。